中国文学研究における物語論

――陳平原『中国小説叙事模式的転変』をめぐって――

中里見　敬

○　はじめに

フランスのロラン・バルト、ツヴェタン・トドロフ、ドイツのフランツ・K・シュタンツェル、アメリカのウェイン・C・ブースらによって、一九六〇年代から精力的に進められてきた物語論（ナラトロジー）の研究は、一九七二年ジェラール・ジュネットの『物語のディスクール』によって一応の達成をみたとされている。[1] 現在では物語論はもはや文学理論の先端というよりは基礎として定着し、文学関係の授業や概説書で必読文献として挙げられていることは周知のとおりである。物語論は、従来の作品や作家の思想性に偏ったテーマ論的研究に対して、本文そのものに即した形式的研究として位置づけられ、ロシア・フォルマリズムや記号論、構造主義の成果に由来している。一九八〇年代、特に八五年のジュネットの日本語訳刊行以来、日本でも物語論が盛んになり、新しいコミュニケーション理論を取り入れるなどして、[2] その機械的適用を超えた研究の深化が図られている。

中国文学の分野についていえば、一九七七年という早い時期に鈴木陽一氏の「『儒林外史』の文体について」[3] という論文が現れたものの、中国における物語論の紹介が遅れたために、それが広く流行するという事態には至らなかった。そうしたなかで、一九八八年に物語論を本格的に導入した陳平原『中国小説叙事模式的転変』[4] が出版され、大きな衝撃を与えた。[5] 同書は、伝統小説から〔新小説〕（いわゆる清末小説）を経て〔五四小説〕へという中国における近代小説誕生の姿を、大量の作品と資料を駆使することによって、雄弁に解き明かすものである。特に、従来のテーマ論的研究とは明確に区別される〔叙事模式的転変〕、すなわち語りのスタイルの転換という文学の形式的観点から

近代小説を位置づけたことは、画期的なものと評価されよう。物語論の中国文学における成果として、陳平原氏をしのぐものは今日なお出現していない。

そこで本稿では、注5所掲の諸氏の論評であまり触れられなかった同書における問題点についてまず指摘したうえで、中国文学研究における物語論の意義と可能性を考えることにする。

一　物語論受容の現状と問題点

本章では中国文学研究における物語論の受容について、陳平原氏の著作を中心に考察する。第一節では物語論全体の理解という観点から重要な一範疇の欠落を指摘し、第二節では物語論細部の個別的問題の一例としていわゆる視点論を取り上げる。

一・一　「態」の欠落――全体的観点から

陳平原氏は第一章「導言」の第一節において、ジュネットとトドロフに啓発を受けたことを表明している。ところが続いて、「しかし私は文学史の研究者として、理論自体の抽象性と完全性よりも、中国小説の発展の実際の過程をより多く考えないわけにはいかない」としたうえで、「中国小説の語りのスタイルの転換は、語りの時間〔叙事時間〕・語りの視点〔叙事角度〕・語りの構造〔叙事結構〕の三つのレベルを含むべきだ」（四頁、傍点は中里見）とする。同書全体に関わる陳氏のこのような考え方について、まず検討を加える。

ジュネットによって一応の到達が示された物語論は、物語内容／物語言説／物語行為という三つの概念を基礎としている。そのうえで物語論の範疇は以下のように三つに大別され、さらに下位区分される。[6]

①時間　（a順序、b持続、c頻度）
②叙法　（a距離、bパースペクティヴ）
③態　（a語りの時間、b語りの水準、c人称）

そして①時間および②叙法は物語内容と物語言説の関係を取り扱い、③態は物語内容と物語行為、また物語言説と物語行為の関係に関わるのである。[7] こうしたジュネット理論の基本の把握をおろそかにすると、個々の概念の物語全体に占める位置が不明になり、ばらばらな分析に終始することになりかねない。物語内容／物語言説／物語行為については、同書でも三八頁に〔史実／記叙／叙述〕という訳語[8]で言及されているが、その扱いはおろそかである。

同書の上編を構成する「時間」「視点」「構造」の各章は、「時間」「視点」が一応ジュネットの「時間」「叙法」と対応するのに対して、「構造」は陳平原氏が自身の創案だと

言明するように（四頁）既存の物語論とは無関係である。その結果、ジュネットの「態」に相当する部分が完全に欠落してしまったことは、物語論全体の受容を不完全にするだけでなく、「態」が語り手の問題を含み最も生産的な議論が期待される範疇の一つであるだけに、同書の最大の欠陥となっていることは否めない。

ところで、プロット・人物・背景のどれに重点を置くかという、陳氏のいう［叙事結構］は、必ずしも彼の独創によるものではない。例えば、チェコのプルーシェク氏が魯迅の「懐旧」を論じて、「故事情節」ではなくて「某種気雰、某種情境、或人与人之間的種種関係」を表現しているというのは、陳氏の観点を完全に先取りしたものである。[9]

陳氏の［叙事結構］は、何が書かれているかという物語内容だけに注目するものである。物語論の対象はあくまでも物語言説であって、シニフィエとしての物語内容はシニフィアンとしての物語言説との関わりの中でしか問題となりえない。さらに、陳氏はその［叙事結構］をプロット中心から、人物性格へ、さらに背景雰囲気へという単線的進化を前提としているように見受けられる。しかし、これこそ様々な歴史的・様式的展開の可能性が考えられるべき個別文学史の課題であって、西欧文学史の流れを唯一の法則として絶対視すべきではない。

この点については、陳跃江「読《中国小説叙事模式的転変》」[10]が、「（陳平原氏が）なかでも中国小説の特徴に適合した［叙事結構］の問題を強調したことは、この［結構］（という概念：中里見補）を使用することが物語論の一般原則に背かないだけでなく、中国現代小説の発展を基本的に把握することをも可能にするものであるから、間違いなく賢明な選択である」として、陳平原氏の主張を受け入れるかたちで、逆に高く評価している。

しかし、物語論と個別文学史の関係は、一般言語学と個別言語学の関係に似て、決して一方が他方を排除するものではなく、相互に補助となりうるものである。一般言語学がラング／パロール、共時態／通時態といったあらゆる個別言語学に有効な基本概念を提供するのと同様に、物語論の基本概念は中国文学に対しても――それが物語論の対象である限り――完全に有効であると考える。陳跃江氏の「A民族文化圏で生まれた批評方法を直接用いて、B民族文化圏の文学現象を分析すること自体が、そもそも危険なことである」というような過度に自国民族の特殊性を強調する傾向が、中国の学界全体を代表するものとは必ずしもいえまいが、こうした論調に「中体西用」を感じるのはあながち筆者だけではあるまい。

ジュネットの『物語のディスクール』が、『失われた時

を求めて』という個別のテクストの批評と物語論という一般理論との間で「寝返りをうつ」――ジュネット自身の比喩によれば――ものであったことを想起したい。陳平原氏が中国文学の実情に忠実であろうとするあまり、物語論自体の整合性を恣意的に切り捨てたことは、後続の読者が同書によって物語論に出会う可能性が大きいだけに、やはり遺憾だといわなければならない。

なお以上述べたことは、中国における外国の文学理論の紹介と翻訳の現状によって決定的に左右されることであって、これを陳平原氏個人の責に帰すことは不当であることはいうまでもない。陳氏が参照したジュネットの翻訳は、注8前掲の栗浩・顧憶林訳「叙事語式」である（六五頁）。日本語訳と対照すると、そこに訳出されたのは原著の「序」の一部（日本語版一五頁～一七頁下段一七行）と、「Ⅳ叙法」から『失われた時を求めて』の分析部分を省略した部分（一八七頁～二〇四頁上段二行、二一七頁～二三二頁）である。「Ⅳ叙法」のみの翻訳であるために、「序」の部分訳が付けられているにもかかわらず、ジュネットの理論全体を把握することは不可能である。特に、「Ⅴ態」が欠落していることは、陳氏の物語論理解を限定しているし、次節で取り上げる「パースペクティヴ」と「人称」の混同を生む原因ともなっている。ほかに、王文融訳「論小説創作的視点――投影、聚焦、変異和多語式」[11]も、ジュネットの「Ⅳ叙法」の後半（二二〇頁下段一八行～二四六頁）を翻訳したもので、中国での物語論の紹介はいわゆる視点の問題に関心が集中している。

一・二　「視点」と「パースペクティヴ」「人称」――個別的観点から

このように物語論の翻訳がいわゆる視点論に集中していることは、中国語読者の物語論全体の理解を大きく阻害しているだけでなく、細部の理解にも偏向をもたらしていると考えられる。

陳平原氏はジュネットを引用して、「視点」は「十九世紀の末以来、物語の技法にまつわる議論の中で最もホットな問題であり、しかもすでに申し分のない成果があがっている」（六五頁）としている。しかし、原著の直後――「遺憾ながらその大半が、本書において私が叙法と呼んでいるものと態と呼んでいるものとを混同しているのである」――を読めばわかるように、ジュネットの文章が従来の視点論を批判する文脈であることは中国語訳からも理解でき、陳氏の引用は不適切だといわねばならない。[12]

ところで、このいわゆる視点論こそ、ジュネットによって「パースペクティヴ」「人称」という異なる二つの範疇――「叙法」と「態」――に属する概念であることが明確

に示され、それ以前の混乱が解決された問題であった。本節では、物語論の個別的問題の検討の一例として、いわゆる視点論を取り上げることにする。

陳平原氏は第三章第三節では［新小説］の［一人称叙事］を、第四節では同じく［三人称限制叙事］を扱い、さらに第六節では［五四小説］の［一人称叙事］を、第七節では同じく［三人称限制叙事］と［純客観叙事］を論じている。このように［中国小説叙事角度的転変］と題された第三章の中心を占めるのは、語り手の「人称」なのである。

陳氏の視点のとらえ方は、例えば小西甚一氏が一人称と三人称を分けたうえで、さらに「全知視点」「限定視点」「客観視点」に分類した[13]のと類似しており、ジュネット以前はしばしば見られた語り手の「人称」と「パースペクティヴ」を混同したものである。ジュネットの功績は、この二つを異なる範疇に区別したことである。

こうした概念の混乱を端的に示すのが、五四時期に導入された［小説視角理論］には、「人称」を扱うものと「視点」を扱うものとの二種類があり、後者の方が明らかに科学的で重要だと論ずる部分である（八八頁）。語り手は誰かという「人称」の問題と、誰が見ているのかという「パースペクティヴ」の問題は、ジュネットのいうように異なる二つの範疇であって、どちらが重要かを論じるにはあたらない。

この二つの範疇を理解するには、ジュネットだけでなく陳氏も言及する（七二頁）シャーロック・ホームズを考えてみるのが便利かもしれない。ワトソンがホームズのことを語るのと、アガサ・クリスティの語り手がポワロのことを語るのとは、「パースペクティヴ」に関しては「主人公の行動を外部から客観的に見つめる形で描いている」〈外的焦点化〉で一致している。ところが、「人称」すなわち語り手と物語内容の関係（語り手が作中人物として登場するか否か）から見ると、ワトソンが作中人物であるのに対して、ポワロについて語る語り手[14]は物語の中に登場しない仮構の存在であって、前者は〈等質物語世界〉の、後者は〈異質物語世界〉の語り手と区別される。言い換えると、語り手が作中に登場するときには、語り手は自分自身を一人称で呼ぶことができる（ワトソン）。それに対して、語り手が作中に登場しない場合には、語り手はいかなる作中人物をも一人称で呼ぶ機会はないということになる（ポワロの語り手）。このように「パースペクティヴ」と「人称」は互いに干渉することのない異なる範疇に属すというジュネットの考え方は、きわめて明晰である。

陳氏が繰り返し説く、見聞を語る報告者としての［新小説］の一人称の語り手に対して、［五四小説］のそれは語

り手自身が物語の主人公となるという指摘(七七、九二頁)も、同様に語り手と物語内容との関係から整理しなければならない。つまり、[新小説]の語り手は〈異質物語世界〉の語り手であるのに対して、[五四小説]では〈等質物語世界〉の語り手となっているのである。

第三章のテーマである[叙事角度]とは、「パースペクティヴ」だけでなく「人称」をも含むより広い概念を考えていて、[視角]や[視域]という用語で「パースペクティヴ」のことを指していると受け取れないこともないかもしれない。しかし、そのような用語の定義は行われていないし、読者に理解できるように整理して論じられてもいない。ジュネットは「パースペクティヴ」と「人称」の概念をはっきり区別したうえで、両者を掛け合わせて〈物語状況〉の類型を表にまとめている。[15] 陳氏のいう[叙事角度]もそこまで発展する可能性を秘めているだけに、その前提として「パースペクティヴ」と語り手の「人称」の問題とをきちんと整理して論じてほしかった。本書は中国小説研究における物語論の最大の成果であるだけに、こうした概念や用語の混乱が今後に引き継がれないように注意しなければならない。

細部に未整理な部分を含むとはいえ、第三章の論述は、[伝統小説]の全知の語り手から、[新小説]の日記・書簡体、[五四小説]の告白体へという形式の変化を、本事の真実から表現の真実へという真実性追求の質的変化として論じて(一〇一頁)余すところがない。その過程で当時の多くの評論が生き生きとよみがえってくる。近代文学の成立と文学の真実性の問題は、西洋や日本の場合と同様に、近代中国も直面していたものであることが鮮やかに示され、本書における圧巻といってよいだろう。

二　物語論の意義と可能性

本章では、中国文学研究における物語論の意義と可能性を、陳平原氏の著作を中心に、ときには氏の論述の範囲を超えて、三点に分けて考えてみる。

そもそも物語論は、ソシュール以後の記号論の帰結として、(シニフィアンとしての)物語言説と(シニフィエとしての)物語内容とを区別したことから出発した。同時に、ことばはあらかじめ存在する現実や作者の意図を再現・表現・反映 representation するものだという言語観・小説観を否定することとつながっている。物語論を選択するということは、このような言語観の転換を引き受けるということである。

陳平原氏は「新しい叙事模式がより正確により生き生きと現代人の生活と感情を表現しているかどうか」(二五二

頁）を、［叙事模式］転換の評価の基準としている。また同書の随所で、「個性を発揮し、自己を表現する」という五四の精神を［叙事模式］転換の要因として結び付けている。このように小説の形式を作者の精神に還元する論法は、物語論が前提とする言語観と相容れないだけでなく、西洋小説の衝撃とそれに伴っておこった伝統文学の組替えが、中国の近代小説の成立を可能にしたという、文学の形式面に着目した同書の基本的主張とも齟齬するものである。

しかし、陳氏が小説は単に社会現実の反映であるという見方から離脱していることは、中国伝統の［史伝］の影響が五四以後もリアリズム論として病的なまでに中国を支配しているという記述（二三四頁）からも明らかである。だが陳氏は別の論文において、「小説は鏡のように真に客観的に社会生活を反映するのだろうか、それとも作家の魂での反射を経て変形を被ることを避けられないのだろうか」と問い、後者を採る。[16] つまり、小説を現実の直接の反映とみる説は否定するものの、作者の目を通した現実の反映、あるいは作者の意図や感覚の表現だという言語観・小説観は温存されている。しかしこの両者はいずれも言語を何らかのアプリオリに存在するものの再現だと見なす点において、基本的には共通の認識だといわねばならない。

ロマン主義からマルクス主義にいたる流れが人間中心のヒューマニズムを根底に持っているとすれば、記号論の考え方は現象を人間の精神や思想といったものに還元しない反ヒューマニズムを特徴としているといえる。[17] 記号論の帰結として生まれた物語論を採ることは、言語観・文学観の決定的な転換にまで至らざるをえず、さもなければ容易に従来の現実反映論や作家論へと回収されてしまうことを第一に指摘しておく。

第二に、陳平原氏のその後の研究を見てみると、文学史の書換えという方向へ大きく傾斜していることがわかる。そのことは、同書に先立って発表された「二十世紀中国文学三人談」[18]の中でも示唆されていた。また本稿でもすでに引用したように、理論そのものの追究よりも、文学史的な関心に重点があることが表明されていたのである。

従来、アヘン戦争・五四運動・人民共和国成立という政治的エポックによって、近代・現代・当代という文学史の区分が行われていたことに異議を唱えて、西洋文学の影響と中国伝統文学の組替えが顕著になる一八九八年以後を［二十世紀中国文学］として把握することが、「三人談」では提唱されている（この年に梁啓超の「訳印政治小説序」が『清議報』に発表され、翌年には林紓訳の『巴黎茶花女遺事』が出ている）。そして［二十世紀中国文学］全体を伝統文学から現代文学への転換の時期ととらえ、しかも現

在をもその過程の完成していない過渡期だと見なしている。こうした現状認識は、『中国小説叙事模式的転変』でも暗示されており（二五四頁）、また「二十世紀中国文学三人談」においては明言されている。陳平原著『二十世紀中国小説史第一巻1897～1916』[19]は、このような意味での文学史書換えの試みなのである。

こうした陳氏の方向は、ヤウス『挑発としての文学史』[20]を想起させる。ヤウスは文学の社会的機能を重視するマルクス主義と、美的機能を重視するフォルマリズムの橋渡しを企図して、読者の〈期待の地平〉概念を導入して受容美学の観点からの文学史を構想した。本書でも第五章「伝統的創造性転化」で、ロシア・フォルマリズムのシクロフスキーの理論が活かされており、従来の歴史社会性に偏った文学史から文学の形式面を視野に入れた新しい議論となっている。[補注]

教科書的文学史ではなく専門的文学史が必要だと陳氏が言うように、[21]中国においては自国の文学史書換えは確かに切実な問題であろう。例えば、近代小説が伝統小説の通俗性を捨てて、書面化・文人化の方向に進んだという認識（二九七～二九九頁）は、文語文を廃し白話文によって反封建の新文学樹立を目指したという従来の文学革命や［五四小説］の評価を根底から覆しかねない指摘だといえよう。しかし、歴史社会主義的観点から一元的に文学をとらえる立場と決別することは、決して文学史の書換えにとどまるものではないことを強調しておきたい。『中国小説叙事模式的転変』が示した従来の文学研究への懐疑のもつ射程は、きわめて広いといわなければならない。同書で活かされている物語論・フォルマリズム・メディア論[22]のほかにも、読者論やコミュニケーション論などは、いずれも文学研究の領域で近年積極的に試みられている方法である。同書の最大の意義の一つは、中国文学を従来の束縛から解き放ち、多元決定の所産としてある文学テクストを様々な角度から見直すことを可能にした点にあるといっても過言ではあるまい。

第三に比較文学研究の可能性を挙げておく。同書では中国の文学史という限定のために比較文学の視点は欠如していた。にもかかわらず同書は今後の比較研究にとって貴重な基礎となるだろう。例えば、日本の近代小説成立の問題をやはり物語論の観点から考察した小森陽一氏の研究[23]などと併読することによって、同書の取り扱う問題が中国文学史の範囲を超えた普遍的なものであることは容易に理解されるだろう。

三　おわりに

物語論の導入が欧米に二十年遅れたとはいえ、陳平原氏の著作は中国小説研究を一挙に新しい段階に引き上げるものであった。しかしまた、同書以外に目立った物語論の成果があがっていないことも事実である。

本稿は、西洋の文学理論書が日本語訳で容易に入手できるという条件を利用して、一方的な論評に傾いたかもしれない。しかし、陳氏の著作が困難な状況で執筆されたものであるにもかかわらず、海外の読者にも計り知れない啓発と鼓舞を与え続けていることが、その価値を十二分に証明していることは言うまでもない。むしろ心配すべきは、陳氏の試みが孤立し、正当に評価されないことである。

ジュネットの物語論は、物語行為という概念を加えることにより、物語（ナラティヴ）を伝達過程の中で定式化するところに一つの特徴があった。しかし、物語を含む文学研究の対象には、定式化によっては十分説明されないような創造的な意味作用が認められることも確かである。文学テクストにおける意味生成の全貌を明らかにするためには、今後も困難な道のりが予想され、物語論はそうした記号論的実践のほんの一階梯にすぎないといえる。そのような物語論を経験することなくして、中国文学研究が次の段階に進むことはないだろうし、また中国文学だけがそうした動向と無縁である理由はないように思われる。

注

（1）○バルト、花輪光訳「物語の構造分析序説」（『物語の構造分析』みすず書房、一九七九、初出は一九六六）
○トドロフ、菅野昭正・保苅瑞穂訳『小説の記号学――文学と意味作用』（大修館書店、一九七四、原著は一九六七）
○シュタンツェル、前田彰一訳『物語の構造――〈語り〉の理論とテクスト分析』（岩波書店、一九八九、原著は一九七九）
○ブース、米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳『フィクションの修辞学』（書肆風の薔薇、一九九一、原著は一九六一）
○ジュネット、花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール――方法論の試み』書肆風の薔薇、のち水声社、一九八五）　ジュネットには同書に対する批判に答えた次のものもある。和泉涼一・神郡悦子訳『物語の詩学――続・物語のディスクール』（書肆風の薔薇、一九八五、原著は一九八三）

（2）例えば、ヤコブソンのコミュニケーション・モデルに対して、コミュニケーションの非対称性を重視するもの。
○柄谷行人『探求Ⅰ』（講談社、一九八六）
○立川健二『誘惑論――言語と（しての）主体』（新曜社、一九九〇）

（3）『中国語学』二二四、一九七七

(4) 上海人民出版社、一九八八。以下同書からの引用は頁数を記し、原語の引用は［ ］で示す。

(5) 日本での反響に限れば、以下のものがある。
○鈴木陽一「書評：陳平原《中国小説叙事模式的転変》を評す」（『中国古典小説研究動態』二、一九八八）
○清水賢一郎「パラダイム転換を迫る文学史――陳平原著『中国小説叙事模式的転変』」（『東方』一〇九、一九九〇・四）
○大木康「中国小説史の一構想――陳平原氏の『中国小説叙事模式的転変』に寄せて」（『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』汲古書院、一九九一）

(6) ジュネット、和泉涼一・神郡悦子訳『物語の詩学』訳注一九三～一九七頁参照。

(7) ジュネット『物語のディスクール』二二～二三頁

(8) 栗浩・顧憶林訳「叙事語式」（『外国文学報道』一九八五年五期、内部発行）では、［故事／叙事／叙述］という訳語が採用されており、かつ簡明な解題が付されている。

(9) Jaroslav Průšek, Lu Hsun's "Huai Chiu": A Precursor of Modern Chinese Literature, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 29, 1969. 引用は、普実克、沈于訳「魯迅的《懐旧》――中国現代文学的先声」（楽黛雲編『国外魯迅研究論集（1960～1981）』北京大学出版社、一九八一）四七〇頁による。なお陳平原氏は、八一、二二一、二四〇、二六二頁などでプルーシェク氏を引用している。

(10) 『読書』一九八九・六（生活・読書・新知三聯書店）

(11) 『文芸理論研究』一九八五・四、『覆印報刊資料　文芸理論』一九八五・十一再録

(12) ジュネット『物語のディスクール』二一七頁。栗浩・顧憶林訳「叙事語式」二八頁。

(13) 小西甚一「能の特殊視点」（『文学』一九六六・五）

(14) 実はポワロの語り手は一様ではなく、ヘイスティングズ大尉を語り手とする作品などを除く。なお、ジュネットはポワロの語り手すべてが作中に登場しないと誤解しているように見受けられる。ジュネット『物語のディスクール』二一八頁、訳注（一）三六六頁。

(15) ジュネット『物語のディスクール』二一九頁、および『物語の詩学』一二一頁～一三七頁。

(16) 陳平原「小説史体例与小説史研究」（『中国古典小説研究動態』四、一九九〇）七頁。マルクス主義批評の反映論については、テリー・イーグルトン、有泉学宙ほか訳『マルクス主義と文芸批評』（国書刊行会、一九八七）七六～八二、九三～九七頁を参照。

(17) なお、池上嘉彦『詩学と文化記号学――言語学からのパースペクティヴ』（講談社学術文庫、一九九二）「学術文庫版へのまえがき」では、「人間」を射程に入れた言語科学の確立が近い将来の課題だといい、「人間」を排除した形式主義を克服する動きも始まっている。

(18) 『読書』一九八五・一〇～一九八六・三に連載（生活・読書・新知三聯書店）。のち単行出版された（人民文学出版社、一九八八、未見）。

(19) 北京大学出版社、一九八九

(20) 巻田収訳、岩波書店、一九七六

(21) 『二十世紀中国小説史第一巻1897～1916』巻後語、三〇

○頁

(22) 日本での主な研究には、平田昌司「紙と印刷からみた漢語史断代」（『山口大学文学会志』三九、一九八八）、清水茂『中国目録学』（筑摩書房、一九九一）がある。

(23) 『構造としての語り』（新曜社、一九八八）『文体としての語り』（平凡社、一九八八）

（補注）異化の理論を文学史に応用するもの。シクロフスキー「『主題』をはなれた文学」（水野忠夫訳『散文の理論』せりか書房、一九七一）のほか、トゥイニャーノフ「文学的事象」「文学の進化」（水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』せりか書房、一九八二）参照。